

『死』⁽¹⁾

オルガ・オロスコ
三角 明子 訳

(さまざまな) 死

ここに幾人かの死体がある、その骨は雨に打たれても白くはならないだろう。

トカゲの皮膚の激烈な一撃が一度も鳴り響いたことのない墓石

涙の光を灯しながら目を通すひとひとりさえない碑文

これはどの記憶のなかにも足跡のない砂地だ。

たむけの花もない死者たちだ。

かれらはわたしたちに手紙も、同盟も、肖像画も遺さなかった。

栄光や不面目の証拠となる英雄的記念品のひとつも。

かれらの人生はこの世において名誉なく終結した。

しかしその運命は切断面のように炸裂的。

幸福によって売られた汚辱の寝床では、夢も平和も知るにいたらなかったからだ。

塩水の強欲な滴よりも燃えさかるひとつの法を攻撃してただけだからだ。

あの法、他ならぬ。

あれ、他のどれでもなく。

それゆえ、かれらの死はわたしたちの人生の激昂させられた顔なのだ。

Las muertes

ゲイル・ハイタワー

私はただ平和を求め、ごまかしたりはせず、

彼らの言い値で支払ったのだ。

ウィリアム・フォークナー『八月の光』^(註)

『死』

わたしはゲイル・ハイタワーだった。

牧師にして狂信者

皆には呪われし者と見られた。

神にとつてどうだったかなど、知るものか！

わたしの人生は愛ではなかった、慈悲でも、希望でも。

たんに野放しの贈与で妄想の王国を養ったに過ぎない。

わたしのなした冒涇すべて、不運すべても、

夕暮ごとに灯した窓ひとつの代価以上のものではなかった。

あそこであの墮落者はなにを待っていたのか？

どんな平和がかれに報いるというのか？

果実のように光のなかで発酵する虫たちのうなり

贖罪と暴力に支えられたコーラスのあの和音

そしてその後、天と地が稲妻に打たれたかのように深淵に沈んだあの唯一無二の瞬間に騎兵隊のたてる大轟音が時の狭間に辿りつく銃弾の衝撃音ひとつとギャロップのあいだで燃えるあの稲妻のような栄光。

あれがわたしの祖父の死だった。

その瞬間にわたし、

ゲイル・ハイタワーは、生まれる二十年前にもう

わたしがそうだったものになったのだった。

あの砂煙の不毛のなかで永遠に呼吸する盲目のつむじ風。

どの赦し、どの断罪が

ひとつの影の歩みを照らしだすのだろうか？

Gail Hightower

カリーヌ

わたしは死にました。

心臓が灰になったのです。

クロムリンク『カリーヌ、あるいは自分の魂に夢中な娘』^(註)

さらば、傷ついたガゼル。

固い雪を湧きだすおまえの心臓は、湖におりた霜に開く花冠よりもいまは冷たい。

わたしの顔を転げる侮蔑と

わたしが居残る日のじめついた皮膚を見つめる吐き気を包むため

この両手のあいだに最後のため息を残しておいてくれ。

眠れ、カーリーヌ、眠れ、

あそこで。そこでならおまえはじぶんの不幸すべての凍りついたイメージではなからう

愛の栄光が死ぬときおまえが沈んでいくあの落ちた空でなら。

おまえの孤独は犯罪で蹂躪された体のようにわたしに痛みを与える。

おまえの孤独。ひとりひとり孤独のいくばくか。

いや。誰も来るな。

つややかな亜麻布のようなおまえの影に入り、涙を拭くものがいてはならない。

おまえがひとりで落ちる場であるあの彫像を、記憶の中でさえ誰が支えられるというのだ。

おまえの野生の純粹さをかれらはどんな無垢の空虚な衣類で装うというのだ。

火のように己に衰弱したおまえの愛の顔が、どの消え入りそうな光のたまりに隠れるのを見るというのだ。

おまえの血の聖なる復讐を、どの未練がましい地獄から量るというのだ。

【死】
どれほど多くの運命が同じ名前で呼ばれることか。

そしておまえが愛した奴、

傷からと同じくおまえの過去が立ち止まらず逃げていく壁をうすく開けた男は、

おまえの足どりの塵を噛むことができるだけで

そして泣くだけで、手を束ねられて泣く以外になくて、

後悔の結び目のうえで泣くだけだ。

それも、わたしたちが消した日々がもうこの世の光のもとには甦らないからだ。

赦しについて話すのはやめよう。免償状について話すのはやめよう。

あきらめ青ざめたあの息子たち

夢のすりきれた屋根裏で硬貨数枚を数える物乞いの目をした王たちは、

すべてが落ちて

すべての亡命で諦めがおのれの歌を立ちあげるときには。

眠れ、カリーヌ、眠れ。

哀れな幻滅者

軽蔑よりも高いおまえの死に庇護され

おまえが自分のためとっておいた目もくらむような喪服ではなく

時の被いを壊すものとなる場で。

そしてまだ言う

わたしは死を死んだのではないのよ、フレデリック、

心臓が灰になったの。

よそももの

かれはおまえたちのあいだを縫っていった

近隣の小屋の火の熱のように心優しいひとびとよ

だが胸の奥深くで揺れる刃こぼれした短剣でないのなら、おまえたちのアクセントとはなんだったのか。

かれはおまえたちが通り過ぎるのを凝視した、

従順な草原の野獣のようにまどろむ日々。

だが、まぶたの下で燃えさかる砂でないのなら、おまえたちの平和とはなんだったのか。

遠くを風が駆けていった、頬の塩気を放っておかない風が。

遠くにその影のための場がある、真新しい祖先たちの影の傍らに。

遠くでは不在は今ほどの不在ではないだろう。

おお！ 涙を乾かせ

あのよそのもの渴きには何の役にも立たないのだから。

おまえたちの祈禱は取っておけ。

かれは愛も、天国へのもうひとつの亡命も求めてはいなかった。

そして大地が侮辱された継母の子守唄を立ち上げるままにしておけ

「わたしはイチヂクの木の子葉のように粗く敵意に満ちた心臓を持っている」。

El extranjero

『死』

クリストフ・デートレフ・ブリツゲ

ウルスゴーのこの屋敷はクリストフ・デートレフの死でいっぱいになった。
かれの死だけで。

大さじでその毒を飲みはしなかった

杉の伸びていく影でかれの胸に待ち伏せは届かなかった。

かれはその血のなかにおれの死を運んでいた

約束された女王を宣言する鏡が並ぶ燃えさかる回廊。

そしてある日、あの狂った妻のようにそれはやってきた。

六十の昼と夜がウルスゴーでの怒り狂う婚礼を見届けた。

クリストフ・デートレフの死はもう何日間もウルスゴーに居座って、
あらゆる人たちと話をし、要求をつきつけていた。

ライナー||マリア・リルケ『マルテの手記』⁽¹⁾

叫び声を聞いてやってきた愛の葬送歌

婚礼のガーゼの霧を引き裂く犬と従者たちの行進

とある運命の皮膚にカサガイのように張りつきまだ生きていた物たちを沸騰する憤怒の波が根こそぎにした。
婚約式を知らせる鐘に招かれなかった者などいたか？

クリストフ・デートレフ・ブリッゲの死に引きずられて死ぬのを恐れない者などいなかった。

それはこの屋敷が知っている。

あの新婚のひとびとの行進がひとつひとつの扉に響きわたる

構内から構内へと時はあとずさっていた、晴れ着を消しながら

そして最後のひとつに到達した

ここで命は、捨てられた愛人のように、粉々になった顔の結晶をその手に包み隠した。

そしてすべては成就した。

『死』

この広漠とした屋敷のなかには帝国の旗印に包まれたクリストフ・デートレフ・ブリッゲの死だけ。

Cristoph Detlev Brigge

ノイカ

(J. バトレ・プラナス^(V)の絵に描かれた人物)

おまえたちはその名を聞いたことがない

しかし、ありふれた夢が燐光を放つ網を時の顔のうえに織りあげたとき

ノイカは存在した。

おまえたちにとって彼女の頭髮は、最初のクリスマスが天国へと昇っていく昏睡状態の波だったかもしれない

―霜のおりた水晶の枝を手に、喉には銀のベルトをつけて漂うあの花嫁―。

魔法にかかった群衆を愛が両手で叩くとき

おまえたちにとって彼女の衣類は、ゆるやかに葉がおちていく領域だったかもしれない。

たしかなことはノイカは

世界の輝きを黙らせながら整える地下の生き物たちの女神だったということ。

さあ、彼女を認めるがいい。

水晶に対する塵と壁の苔むした影のメロディーになるため行ってしまふ前に。

巡る世紀の天窓が開け放たれたまさにこの扉で、永遠に彼女を見つめるがいい。

そこで彼女はバランスを取る、別れを告げながら

曙の最後の明るみのなかの祭壇の灯のように。

むこう側に横たわるのは彼女の幻の王国。

【死】

おまえたちは決して入るな
思い出と忘却のもとで、ともに沈むことになるだろうから。

Noica

マルドロール

ああ！ いったい善悪とは何なのか！ それは同一のもので、

ぼくたちはそれによって自分の無力を、そしてどんなに途方もない手段を用いても

無限に到達したいという情熱を、狂おしく証しだてるのか？

ロートレアモン『マルドロールの歌』^(註)

おまえ、渴きがちょうど両手をあわせた窪みにおさまるものよ
こちらを見るな。

立ち止まるな。

というのも、おまえの幸福を

目もくらむ天のほろきれに包まれおまえが閉じこもる水晶のそのかけらを力で腐らせる誰かがいるからだ。

マルドロールという名だった。

かれは神と人びとから逃走した。

神の地獄のため全人類から選ばれ

ひとりひとりの人間を断罪するため、すべての神のなから選ばれた。

かれは、生者のあいだに不死者として生きるため戻された誰かより孤独だった。

その心臓に蛇の腕をもつ憤怒がもつた者はどうなったのか。

野獣の法を遵守するため塀を飛び越えた者は、

血に混じる渴きの毒を飲んだ者は、

呪いのまなざしが天のまきばに侵入するのを防ぐため一度も眠らなかつた者は、

燃えさかりながら、灰の一口のように宇宙を吸い込もうとした者は。

罪ではない

夢でもない

悔いる一握の塵でも。

わたしの影の蒸気から、王国を勝ちとろうと争うため錯乱した馬に乗り戻ってくる天使の火花散る仮面がときおりたちのぼる。

かれはわが家を揺する、

いにしえに若者たちの肌を引き裂いたように光がわたしを裂く

そしてわたしの夢の布を、かれのハンセン病がむしばむ。

あれが通りすぎていくマルドロールだ。

めぐる世紀の終わりまで、反抗のうたを世界に対してあげるだろう。
かれの歩みは時の顔に刻まれた潰瘍だ。

Maldolor

ミス・ハヴィシヤム

『死』

ここにミス・ハヴィシヤム眠る。

失望の豪華な虚栄。

ある日幸福のために屍衣をまとった、

そうとは知らず。

それはまさにその時だった、とある夢の音楽が追いついて

愛のいつわりのロープを誰かが痛烈な一撃で断ち切った

そして彼女は離れて落ちた、壊れた雲のように、闇へと。

すべては終結した。

うつろな花嫁が憎しみのため霜ふりたおのれの心臓のかけらを拾い集めた場所には侵入するな。

入っていった者は、すべての嘆きを盲目的にあがなうため選ばれし者だった。

封印を破らぬこと。

光の手は浮遊する衣類と

すべてが朽ち果て、わたしがウエディング・ドレスを着て

花嫁のテーブルにのせられる時――。

チャールズ・デイケンズ『大いなる遺産』^(註)

昆虫たちの強靱な王朝によって齧られたテールレースをまきちらしたことだろう。

水鏡は最後のイメージの墜落のあとですら乱れていた。

広漠たる場所で食事に招かれた客たちは、掘り返された女を取り巻く

穏やかな負債であつたらう、

その女は萎びた花嫁、まだ復讐と軽蔑の燐光を放っていた。

もう彼女は死んだ。

お通りなさい。

これは年月が誇り高き忍耐のなかにとつておいた光景だ、

これは彼女の死の炎に包まれた掛け布に落ちた豪華な織物の糸。

すばらしいかがり火だった。

そうだ。無駄な乾燥よりも、その陰鬱な地獄よりも、

よき火のタネとなるものはない。そこで彼女は永遠に燃え続ける、

ピップがやってきて彼女の名前の下に

「許す」と書くまで。

『死』

バートルビー

いったい彼は自分が何者なのか、どこの出身か、
そして親戚がいるのかどうかさえも言おうとしない。

ハーマン・メルヴェイル『書記バートルビー』^(註)

かれが誰だったか知るものはない。

無声のしるしよりも人びとに近かった試しなどない。

灰色の服で絶望に耐えた日々を数えあげることでもできたらう。

すくなくとも、空白の壁のうへの夢の影を描写することならば。

だがそうしないことを選んだ。

わたしたちのもとには蒼白なデスマスクだけが残る。

すべての運命からの呼びかけをかわした静穏なまなざし

絶望的に人生に似ていたかれのイメージ。

わたしたちはかれがわれわれの一部だとは、

知らない忍耐づよい法にわたしたちが寄せる信義だとは考えたくない。

みな、一度はこの星の身の毛もよだつような孤独を感じたことがある

残酷な小石がわたしたちよりも偉大な神秘を動揺させながら

魂の奥底にまで転がるのを。

神よ！ わたしたちは壁に刻まれた数字を解釈できないことを知らねばならないのか？

夜の迷い犬のように吠えなくてはならないのか？ 腕組みをしてバートルビーにならねばならないのか？

そうしたいとは思わない。

単に、慰め、救し、去っていったひとにとても遅く届いた希望の記憶がバートルビーだったのだと信じるほうを選ぶ。

やってこなかった時代の約束が燃えた場所の大火の証人だったと。

といつてもその天ではなからう。別のところでわれわれは会うだろう。
また、世界のもうひとつの顔を眺めながら青ざめて吸い込まれることだろう。
死んだ手紙を一通一通思いかえずに違いない
だが、そのときに至つてもそうはしないかもしれない。

Bartleby

……リエヴァン

少女はこの世に、自分以外に女の子がいるなんて知りませんでした。
いえ、そもそも自分が少女であることすら、知っていたのでしょうか。

ジュール・シュベルヴィエル『海に住む少女』⁽¹³⁾

その子は死んだよ、
シャルル・リエヴァン。
ありふれた日の従順のなかの歩みをなんのために止めるのだ。
なぜ時の水晶のなかに泡が住む凍った天使のようなそのイメージをしまっておくのだ。
だれもその顔を分かちあうには至らない。
光の側からも影の側からも彼女を呼ぶことはできない
青白い夕暮のなか、煙をあげてまわる天上の夜警の車輪は歌わないだろう、
習慣の匂いのする家はないだろう
地図のうえをよぎる父もいない、旅が終わることの運命の不確かな蝶も、
ひとつの稲妻でみんなを結びつける涙の母もいない。

おまえの記憶でいっぱいはやみくもな郷愁のこだまにすぎないのだ、
海の失われた回廊の壁に触れる浮遊する夢遊病者に。

だれひとり、いま死なないことになんの意味があるのだ、その血のあいだに死ぬこともできないというのなら。

彼女のことを考えるのはもうやめろ。

われわれは似た者同士、それぞれの心臓の底から別々の顔つきを

最後の暗闇を開く埋められた燭台を掘り返す必要があるのかもしれない。

われわれが完全に死んでいることを知るために。

これ以上彼女を留めおくな。

彼女が死のなかでに旧い年代を取り戻すに任せろ。

忘れられた名を、空虚な肖像画にあいた乾いた穴である存在の物語を

われわれすべてを夢見ている神、シャルル・リエヴァンの影の影以上のものであるという希望を。

ジェイムズ・ウエイト

.....Lievens

大いなる影と戦い

厚顔な嘘に執着し

おのれの透明な無力に

痛々しい含み笑いを向けていた。

ジョゼフ・コンラッド『ナーシサス号の黒人』⁽⁵⁾

おれ、ジェイムズ・ウエイト、

恐怖と中傷の子は

硬貨が入った箱と忌まわしい秘密を持っていた。

おれの死の狡猾な送信者ドンキンが歩くとコインは共鳴するだろう

そして秘密は乾いた枝のように何世紀にもわたっておれの額をひっかくだろう。

本物のジェイムズ・ウエイトはどこにいる？

かれは森火事よりも華やかな苦悶を装いながら

船に乗って気晴らしの河岸に到達しようとしていた。

しかしある日、かれの背中のおうえで、海の憤激が鞭のように口笛を鳴らした。

本物のジェイムズ・ウエイトはどこにいる？

かれは春の根よりもがんな力を装いながら

船に乗って困難な島に近づいていた。

『死』

しかしある日稲妻のように、この世の貪欲が真実を振り上げた。

やつらが祈祷と呼ぶ脅しと恐怖の屍衣に包まれ、おれは海に投げ入れられた。

ジェイムズ・ウエイトに哀れみを、

かれは死のいかさまに満ちた顔で生を征服し

見せかけの生の顔で死に切り込んだ！

誰も探しに来るな。

かれは沈泥のなかで爪を立てるだろう、木材のねばねばのなかのネズミと同じように。

なめらかな仮面のテントのあと、海が暗い色をした安酒よろしくかれを呑み込むまで。

あの最後の日のため、誰もかれの名を呼ぶな。

ジェイムズ・ウエイトには顔がないだろう。

アンデルスプラッツ

アンデルスプラッツは、なにゆえ息絶えているのでしょうか、

彼女の魂はいつ抜けてしまったのでしょうか？

ロード・ダンセイニ『夢見る人の物語』^(註)

わたしの名はアンデルスプラッツだった、
囚われのまま死した、アクラの不運な娘。

わたしの額の三十のちいさな花輪は母の約束と嘆きだった。

三十のちいさな花輪は、征服者がおのれの剣の光に照らされて夜を明かした三十の記念日だった。

しかしどの花も、平和でも復讐でもなかった。

わたしの狂気だけが

【死】

—凍ったセルバのなかで燃えさかるあの樹木—
最後の夜が落ちたことを宣言した。

そしてわたしはわたしから抜け出た、自分でありつつ、影と同じような別ものになっても。

わたしは別の住処を探す盲目の少女の灰色の服を着て、踏み段をおり山地へと進んだ。

頭髮は炎の束のようで

慰めの天使が、錯乱した両手でわたしの背中を叩いていた。

鍵はどこにあった？ あらたな命を開く扉はどこに？

姉妹たちが来た。

何世紀も前から記憶のなかでと同じ顔をしていた。

記憶はおのれ自身のためひとが創りだすささやかな永遠だ。

そして暗がりのなかでのわたしの足どりを照らしてくれた。

だれひとりこの足跡をたどって戻っては来ないはずだ。

『死』

アンデルスブラッツは征服された女にすぎないのだから。

恋人たちよ、わたしをごらん。

希望と恐怖がおりなす人びとの集いをわたしのランプは照らさない。

絶望するものたちの涙はわたしの城壁には溝をつけられない。

ふるい気候の色と同じくわたしはやさしい諦めの色をしている。

わたしの果実はほとんど風味がない。

征服者たちよ

落ち着いてやすみなさい。

誇りのない夢がなにを冒流できる？

わたしの死を記念して石に重ねた石以上のものをおまえたちは見えない。

密偵たちよ。

花輪はもう持つてくるでない。

そして母に言うがいい、わたしはここで

歓迎されし者なのだ、ここでわたしはあの孤児になりはじめ、そして彼女はすこし不在の者で、もうわたしは空しく待つてはいないのだと。

(唯一の証人、

獣たちの咆哮と、沙漠でわたしの声に鳴り響くかずかずの大聖堂の鐘の音を聴いた者、

遠方の住処に逃げ去るわたしの魂が消えてゆくのを見た者については、

おのれ自身の薄明に包まれて歩いていたとだれかが言ってくれるだろう。

だが教えておくれ、ひとりぼっちで、悲嘆もなく、驚異のイメージを背負っていけるのは誰だ？

さらにまた、恋する孤独な心臓が、

われわれが不可逆的に失われ涙を捧げられて燃える聖所では

われわれの天での場所にはならないのかもしれないのかどうか教えておくれ。)

カール・フィアラ

命じられたからここにおります。ここにおりますのは、

おのれのために何かを求めてのことではなく、報われるためでもないので。

フランツ・ヴェルフエル「小市民の死」^(註)

ある年の一月五日に生まれた。

六十五年生きねばならなかったのは、すべての書類にそう書いてあったからだ。

待ち望まれていた顔ではなかった。

夏に心を奪われたヒマワリの太鼓が咲く庭のあの夢でも

だれも応えないのに遠くから呼びかけるため往来するおそれでもなかった。

フラシ天と肖像画の惨めな栄光を引き延ばそうとする頑迷な熱意でもなく。

日ごとにかれの自由意志が買っていたのは、ささやかな遺産だった。

日ごとにわれわれは、死の暗い硬貨がたてるチリンチリンという音に耳を澄ませた。

だが知らなかったのだ。

人間の側から言うときとは、疲弊するまで色あせつつ永らえている数枚の葉の色に過ぎなかった。

人間にとつてのかれはおのれの肉体に横たわっていた、それはすべてが落ちた家の英雄的な住人と同じで、

そこでは水底の泥と遺蹟が不吉な心臓のわずかな空間を競いあう

その命取りのツタの呼吸によって息を奪われながらそれでも芽吹く呼吸

未耕作地の最後の記憶。

神がみの側から言うとき時間は血と勇敢さをあらわす記章だった

神がみから見ると、かれはおのれの戸口に立ち不眠で任務の交替を見守っていた。

無駄に行列したのは夏の蒸気のようにつややかな娘たち、

王立歩兵連隊の古い仲間たち、

それともすべての恐怖またはすべての希望をもって攻撃をしかける対象いくつかの神聖法をあがめるあの人びと。

狩猟のため、あの輝く仮面や偽りの顔はなになにができたというのだろうか

かれは強固な記章をつけた歩哨だった。

そのほかの恭順も、そのほかの罰もなく。

軍旗が霧を赤く染め

荒々しい全力疾走、トランペットの合図のラッパが雷のように響きわたるまで、

帝国の車列が死の最後の硬貨をころがしながら大地を横切っていくときまで。

カール・フィアラ、了解。

一月七日に死んだ。

枕のしたには暦と金色の縁飾り。

エバンヘリーナ

ここにエバンヘリーナ眠る。

彼女のやさしい大地はあまりにも軽微だった。

だからいつでも天が攻め入ってきた。

樹皮に刻むように彼女が名を刺青したハートはなかった。

彼女の夢の光輪に沈降するほど愛された顔つきもひとつとしてなかった。

だれかがときおり、彼女の空色のドレスをぼんやりと思いつく。

「背の高い並木道を自分のガーゼで包んだ、あの霧のかかった季節の色だったかも……」

それともひよっとして、なにかの童話に出てきた魔法で

捨てられた小舟が夜をついで川を渡り、青ざめた花を何本か、なにかの記念日に運んでいくのだったか」
だれも、一度もそれをわかったものはいなかった。

これはどんな記憶の住処でも

どんな忘却の住処でもない。

だからここでは雑草はたんなる雑草、

だが空色の雑草なのだ。

『死』

放蕩息子の前日

わたし、無垢に包まれて見守る者は

自分の最後の息吹が燭台のろうそくを消したときに出発しなかった者だ。

だがあの伝説的な兆しを解きあかしたのはだれだ？

おお、遠くに！

雲の合間を、秘密の国々の姿が眠る鏡を探していたのはだれだ？

風のなか、叩かれた水晶に文句を言う別の声を耳にしたのはだれだ？

燃えながら海岸を巡りゆくしらせにするべく、火をもって名を木材に刻んだのはだれだ？

おお、使者たちよ！

他者とは立ち去った者のことだ。

しかしかれの顔を通じてわたしはときに過ごす、まるで幼少期の水銀を塗った玉のうえで時がバランスを取るのが見えるかのよう。そしてときにはわたしにまで届く、さまざま木立を越え、そのみじめな王権のきらめきが。

いまはわたしを裁くでない。

わたしとともにかれを待つのだ。

かれの死はわたしに到達するはずだ。その人生と同じく。

放蕩息子

『死』
ここに赦しと断罪の生あたたかい寝床がある。

―愛の侮辱―

放蕩息子の不眠の反逆のための。

そうだ。いにしえと同じく、光を放つ歌とともに孤独が壁を登ってくるとだれかが仰天し

野生の波頭と同じように道なるものの遠く離れた呼吸が肌のうえを歩きまわる。

「立ちなさい。おまえが永遠になるときが来た」

いにしえと同じく、自分を家族肖像画につないでいた何本かの帯を、涙もなく切る。

そして鍵を一本、酸っぱい忘却の苔のしたに埋めるだろう。

あとに残る一軒の家で、かれの記憶は星と稲妻になるだろう。

かれは母の嘆きよりも苦い別の果実を食べてみるだろう。

ほかの熱のなかで燃えるだろう、その盲目的な憤怒は父のかけた呪いを完全に破壊するだろう。

兄の貪欲な帝国よりもっと輝かしいぼろのあいだで目覚めるだろう。

かれのため決闘をたちあげる自由がある場所は、いまでもどこかにあるのか？

あそこにかれの答がある。平和も庇護もない憤怒の法。

しかし夜を夜につき

渇き、空腹そして欲望が火のかたわらでまどろむあいだすばらしい寓話を夢みる放浪の乞食たちのように

わたしの嘆きのくもり水晶の向こうからほかの光景が戻ってきて

消耗しきった顔のあいだから唯一の顔があらわれる

旧貨幣の錆びを通して君主があらわれるように。

それはいにしえの愛だ。

放蕩息子が家の鍵をすくい上げるため戻ってきたいまこのときに選ばれた愛だ。

ある偉大な夢のほかならぬ屍衣で、かれは代価を払った。

おお綱よ、九月の風を封じこめようとする強固な綱よ。

かれを通してやれ。

赦されようと来たのではない。誇りをもって罪のあがないをせよとかれに強いるな。

断罪のため来たのではない。寛大に愛することを強いるな。

ほかの賜物と引き換えに捧げものをつけた枝を手に、いにしえのようにただ来たのだ。

裁くのはあなただけだ。

無慈悲にして公正な神よ。

『死』

オルガ・オロスコ

わたしオルガ・オロスコは、あなたの心臓より皆に告げる。死んだ、と。

孤独を、すべての信仰の英雄的な永続を

奇妙な動物と伝説上の植物が育つ余暇を

かざかざの神秘と幻覚のあいだに過ぎた偉大なる時代の影を

そして夕暮れ時の燭台のささやかな揺らめきも愛した。

わたしの物語はわたしの両手と、この手に刺青を入れたほかのひとの手のなかにある。

わたしの滞在のうち残ったのは魔術と儀式。

無慈悲な愛のひと吹きによって消費され尽くしたいくつかの幸運

一度もわたしたちが訪れたことのない家の遠くたなびく煙

そしてわたしを知ることにはなかつた他者たちのあいだに散らばった手ぶり。

そのほかはまだ忘却のうちに成就し

ほほえむまきばの鏡のなかに、わたしのなかでとおなじく己を探したあの女の顔のなかで、不幸はいまだに汗水たらしている。

あなたは彼女を奇妙に遠く見ることだろう。

彼女はわたしを軽蔑と高慢に包んで

稲妻のようにきらめく最後の瞬間にしまっておきたかっただろう。

あなたの心のつむじ風ではなく

わたしがいまだにしわがれた涙まじりの声をあげる不確かな塚のなかではなく。

いや。この死には休息も偉大さもない。

わたしはこの長い年月のなかで初めて死を凝視していられない。

だがわたしはあなたの死まで死に続けなければならぬ

わたしは移り変わる数々の夢よりも深く暗い法の前でのあなたの証人だから

あそこ、わたしたちふたりが判決を書くところだ。

「かれらはもう死んだ。」

罰と赦し、天国と地獄によって選ばれた者だ。

今は最初の部屋の壁に浮いた湿気の染みひとつだ」。

Olga Orozco

註

- (i) メキシコの詩人オルガ・オロスロ Orozco, Olga (1920-99) が一九五二年に出版した詩集 *Las Muertes* の全訳である。底本として Olga Orozco : *Poesía completa* (Buenos Aires: Adriana Hidalgo Editores, 2012) を用いた。
- (ii) ウィリアム・フォークナー Falkner, William (1897-1962) が一九三二年に出版した『八月の光』*Light in August* より。『八月の光下』諏訪部浩一訳(二〇〇六) 岩波文庫八八ページより引用。詩のタイトルでもあるゲイル・ハイタワーはもと牧師で、祖父が遺した土地で隠遁生活を送っている。
- (iii) ベルギーの劇作家フェルナン・クロムリンク Crommelynck, Fernand (1889-1970) が一九二九年に発表した戯曲『カリース、あるいは自分の魂に夢中な娘』*Carmé, ou la jeune fille folle de son âme* 45。
- (iv) ドイツの詩人・作家ライナー＝マリア＝リルケ Rilke, Rainer Maria (1875-1926) が一九一〇年に出版した『マルテの手記』*Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge* より。『マルテの手記』松永美穂訳(二〇一四) 光文社文庫二四ページより引用。詩のタイトルでもあるクリストフ・テートレフ・ブリッケは、物語の主人公マルテの祖父がかつては宮廷の侍従を務めた人物。
- (v) ファン・バトレ＝プラナス Batlle Planas, Juan (1911-1966) はスペイン生まれのアルゼンチンの画家。
- (vi) ロートレアモン Conte de Lautréamont (フランスの詩人イジドール・デュカスの筆名) が一八六八・六九年に執筆・出版した『マルドロールの歌』*Les Chants de Maldoror* より。石井洋二郎訳『ロートレアモン全集』(二〇〇五年) ちくま文庫二一ページより引用。
- (vii) イギリスの小説家チャールズ・ディケンズ Dickens, Charles (1812-70) が一八六一年に刊行した『大いなる遺産』*Great Expectations* より。佐々木徹訳(二〇一一)『大いなる遺産上』ちくま文庫二二二ページより引用。ミス・ハヴィンシャムは物語の主人公ピップに遺産をゆずるという「大いなる期待」を抱かせた独身女性で、結婚式当日に婚約者に裏切られてから花嫁衣裳姿のまま長い年月を過ごしていた。
- (viii) アメリカ合衆国の作家ハーマン・メルヴィル Melville, Herman (1819-91) が一八五三年に発表した短編「書記バートルビー」"Bartleby"より。牧野有通訳(二〇一五)『書記バートルビー／漂流船』ちくま文庫五四ページより引用。バートルビーは多忙な弁護士事務所の人に応じであられた法律筆耕人だが、筆写以外のすべての仕事を拒否する奇妙な男。
- (ix) フランスの詩人・作家ジュール・シュベルヴィエール Supervielle, Jules (1864-1960) が一九三一年に刊行した短編集 *L'Enfant de la haute mer* の表題作より。永田千奈訳(二〇〇六)『海に住む少女』九ページより引用。海に浮ぶ不思議な場所にたったひとり住む少女は、じつは、子どもを亡くした船員シャルル・

リエヴァンの強い情念から生まれた存在だった。

- (x) イギリスの小説家ジョセフ・コンラッド Conrad, Joseph (1857-1924) が一八九七年に発表した小説『ナーシサス号の黒人』*The Nigger of the 'Narcissus'* : *A Tale of the Sea* より。ジェイムズ・ウェイトは帆船ナーシサス号の暴動のきっかけとなった黒人乗組員で、航海中重い病で伏せる。作中に登場するドンキンも同じく船乗りで、やがて暴動を扇動する存在となる。
- (xi) アイルランドの劇作家・作家ロード・ダンセイニ Lord Dunsany (1878-1957) が一九一〇年に刊行した短編集『夢みる人の物語』*A Dreamer's Tales* 所収、「アンデルスブラッツの狂気」*The Madness of Andelsprutz* より。作中では、擬人化された都市アンデルスブラッツの魂が、母体であるアクラから奪われ征服されて三十年経過し狂気に陥ったさまが語られる。中野善夫他訳(二〇〇四) 河出文庫『夢見る人の物語』二〇七ページより引用(中村融訳)。
- (xii) オーストリアの劇作家・小説家・詩人フランツ・ヴェルフエル Werfel, Franz (1890-1945) が一九二七年に発表した短編小説「小市民の死」*Der Tod des Kleinbürgers* より。詩のタイトルでもあるカール・フィアラは本作の主人公。

